鶉居録

特別
14
1919
150

176427

○七月五日　学校に於て基本金の募集を開いたが、開始を見た事業中に繰延べが多く、その結果として大分経費を要した。御集の寄附金丈では、到底支弁出来ないので、不足をドウしたらよいかと云う問題があった。

大阪府庁も森村市太郎氏に対し、未曾有の基金を持ち、学校を自ら之に移すことを條件とし、森村氏も五万円借入を交渉すること

38- 8949

その内法しに、こんなを森村へ渡すいやとも
すまい、先年毎年二千両宛二万両
山下高田屋の文を仮定四年目より出来る
あるを取り、命して手数料毎月弱ケ二万宋
永代一万四千五百出版印代一万四千二百二
万四百代を弱ケ二万ケ二万のひあるべし、あま
り手紙を結ぶ来れども
特に手紙曰く、文化を出すべしあるべくば
京の手数と森村の手数と九の関係の出来るべば
京の和泉ひとつとも出るべ、

金拾万四千百九十二両九十四銭　　繰料前報
　　百九十八銭

金七万六千四百七十四両五十三銭三厘　　上後軒
　　百四十銭

金拾万六千四百九十二両二十三銭五厘
　　実業家の株式高料
　　二百二銭五厘

計二万七千百四十七銭七厘

備考　南和の里繰料を差引て比べ
　　繰料二万の九百六十八両まり増加スルコト

六千七百三十二円三十銭七厘

内

金七万七千百四十三円四十銭　三月十六日迄拂

金四万五千九百五十七円三十銭七厘　未拂

○慈善外

金七百四十三円九十銭　三橋諫平の妻に慈善として渡す

金　五千二百二十四円　雨天體操場

計七万五千五百二十八円九十銭

寄宿舎賄費

金六千円

合計

金八万八千六百二十九円六十銭

内

金七万七千百四十三円四十銭　既拂

金六万七千四百八十六円二十銭　未拂

右未拂之内

七百八十五円

未拂分

計七百八十五円　御基金を以て仕拂

今此書に依り各郡に分け大地主を擧ぐれば左の如し但し一萬圓以下五千圓以上も算入せしものなり

二百廿五人　北蒲原　二十八人　北魚沼
百六十人　中浦原　二十六人　南魚沼
百五十九人　中頸城　二十二人　東頸城
九十一人　南蒲原　十八人　中魚沼
八十六人　四蒲原　十四人　新潟市
六十四人　古志郡　十三人　西頸城
五十四人　三島郡　九人　佐渡郡
五十四人　羽羽郡　四人　東蒲原
五十四人　岩船郡
計　千〇八十人

又大株主を擧ぐれば左の如し

四十九人　古志郡　十四人　中蒲原
四十四人　新潟市　十三人　北魚沼
二十五人　中頸城　七人　西蒲原
二十三人　南蒲原　五人　岩船郡
二十一人　北蒲原　四人　中魚沼
二十一人　三島郡　四人　南魚沼
二十人　刈羽郡　二人　東頸城
計　二百五十二人

大地主の最も多きは北蒲原にして大株主は古志郡を第一とす而して大株主大地主とも共に第三に位し一両ノ共に發達せしは中頸城なり大地主の十萬圓以上を列記すれば

四十八萬五千三百五十二圓　市島德次郎
三十七萬九千〇二十四圓　白勢長衛
三十八萬千〇七十五圓　田巻丈七郎
二十八萬六千六百四十三圓　伊藤文吉
二十七萬〇千〇七十三圓　佐藤伊左衛門
二十七萬三千七百八十六圓　二宮孝順
二十五萬〇三百十二圓　齋藤美誠
二十三萬七千十九圓　保坂謂治
二十萬四千百五十三圓　田巻三郎兵衛
十九萬七千七百〇九圓　今井孫市
十八萬二千四百二十三圓　市川ムロ
十五萬八千百六十一圓　吉田久平
十五萬〇七百九十七圓　五十嵐甚藏
十三萬六千百二十七圓　齋藤喜十郎
十三萬四千八百五十一圓　間山七衛武
十二萬四千二百五十一圓　國井伊之丞
十一萬九千六百三十一圓　佐藤友右衛門
十一萬七千五百二十六圓　渡邊三左衛門

而して大株主は左の如し

七十五萬六千七百圓　山口權三郎
六十八萬三千五百八十圓　四條清三郎
三十九萬二千九百九十八圓　鍵富三作
二十九萬千五百十七圓　二宮孝順
二十二萬〇八百十八圓　高尾喜十郎
二十萬二千七百三十七圓　渡邊清松
十九萬八千四百圓　市島德次郎
十九圓五千〇〇五圓　牧口義短
十六萬九千百二十圓　佐藤伊左衛門
十四萬七千百五十七圓　長部松三郎
十一萬四千四百三十九圓　川上佐太郎
十一萬三千百七十五圓　白勢春三
十萬三千二百五十一圓　竹山屯
十萬五百三十九圓　木村清二郎

めべきふ

[illegible]

四万八千九百八十七円　佐入ふ

金子[illegible]千円を[illegible]入[illegible]る[illegible]
貴[illegible]ふ[illegible]、五萬円の[illegible]入[illegible]義し[illegible]
[illegible]年来あの主丈を[illegible]べき
[illegible]
○新[illegible]多[illegible]礼[illegible]の[illegible]と[illegible]る一也を[illegible]
[illegible]
[illegible]

大地主は十八名にして北浦原八名南浦原三名中浦原岩船は各々二名新潟西浦原中頸城は各々一名なり大株主は十四名にして新潟古志各々四名北浦原三名刈羽二名北魚沼一名なり

（未完）

株券と地位とを合算する
ハ紙幣を通じて五十萬
圓以上の資産を有する二
と云へべしと雖
十一人あるも、世界の富豪
の
○北どろチャールス、スワンゲの二家族死亡を
後もなほ存在する世界の歴
史上一大富豪たり、世界利益の大なるものも
を除くほかは前記どこ中まで
人を家族の発動に起つたるとて、其の
発動を除き我国の生産の四分体の

の自重心を養成する為し恰も
七年間の久しき平海にて、殆ども安
蒙し居るは京罰を以て抑も主義を
抹消せんとする事国の有るに
以前未曾の各大名の行動を以て
なる罰金例に倣ひ細に
法の明知を過つことその位の規則を逃れ
るも是平の罰金を課する規定ことの
京の事報に行なんとそうに、高の金額の
コンを捨ひ物ひ、動もすれば
なる為し元殺乱を企てたる

とゝい、そこで殺乱うち四十年来に
ウタリと法まのたのうち、どんな法度に
つたことを知んひもなく、即
ち政位主義ひなる、ゆえに自主と自尊
心を記さいとなる少件無い大坂や平
海を一切廃めて仕番つたので、殺乱国を
法度し得た事国ひある、自国の丑米刻
ひ大ひなる風を吹めて自国ひあつたれも
是へ、六年後に基金を集を生つてそうい
なるのを生う集まるのを丑米刻加
を為め、なを彼んうめ一人ひ五十歩やる方

の金を寄附するつもりとなりたりと笑ふまけんぞ米国の学校を設けんとせしもの五十年既あるもの五万円の寄附をしたるものを大変なる学問をしたるものあり（即チアボット、ローレンスガハアーヴァードニ五万円の寄附をなしごとき）又チャールス、マウアサーガ元年間の校費の倍数七千円の金を寄附したのがいとくじんじゃうなもあり、ちうひさ三十年間五千円の寄附ひとりけんぞ格おうるの思ハるの正米和かの校大ごとなるもの寄附のごとくひあるを見る

バルチモアに於て巨額の寄附をなせる人ありしかるに異とするに足らず、えんふまの命を付ものとなるあり、我邦にも一千円以上の金額を寄附したるもの十倍なるべきはずなり、何人の正米和かを負ふ

○学校の教授の報告書を見るに於ていろ〳〵図書館ひとりもいろ〳〵の学問をしてゐるが関係人の経計を左のごとくひとりを図まるものの代と比較して甚しい差ひあるを

○三十五年分

開館日数　一八七　一九七

閲覧人員　十一八三一　一七六四六

日一日平均　二八一、六九　八九、六〇

貸付図書数　一二六五七〇　三一二七四

日一日平均　六八七、八八　一五八、七五

図書の購求並ニ寄贈書籍数ニ就テハ全体ニ於テ多クハ前年ニ比シ、其ノ金額ニ於テ図書ノ購求ニ費ヤシタルモノ多ク、寄贈ノ書籍ニ購ツタルモノ多ク、寄贈しタルモノハ、大抵同ジクらい、今年

前年ニ比シ多クハ無カラズ、即チ

合計

四千九百七十五部

一万四千六百九十二冊

内

購求　二千六百八十五部

一万五百八十八冊

寄贈　二千一百八十七部

四千一百〇五冊

之ヲ更ニ和洋漢ニ区別スレバ

和洋書之部　三千九百六十七部

一万三千二百六十五冊

購求　二千二百六十一部
　　九千九百五十二冊
寄贈　千　七百六部
　　三千三百十三冊
詳書之部　千〇八部
購求　千四百二十八冊
寄贈　四百二十八部
　　六百三十六冊
　　七百八十部
　　九十二冊

此の報告書の四千部余は、今日迄に寄贈者の数、八千部冊を以て、
既に送付したるものなり
こゝに報告するものは、購入者が千四百余部、寄贈者が
三千四百部、購入者が千四百余部、寄贈者が
三千四百余部にして、本年度の図書総数は、
図書総数の三分の二に当たれり、本

年度に於ける我が国の図書購入者が、
リースの図書購入者の年数に比して、千四百余
と云へる仕掛つてあるこゝ先づ七百四十余
部を購入したるこゝ、ついに四百余部
を寄贈の[illegible]数を寄贈者の数を
なることもあつたこゝ、こゝを比して見ると、図書総
数のうちに高等学校の数が多いこゝ
が、係し先づ高等学校の数が多いこゝ
の前年度の四千萬円動産総額のうちに
きまつたこゝの作成者が、我邦の動産の歴
史を印刷したこゝ、こゝを明白

印紙代を多くして営業の者の得を
印紙の歴史 明治の時代にて設けの所にて
今日まで此の書物を写さんと、此ごろ
写えて書いたのを此の書物が出来ちんば
絶えうるの事なれども、生きるとの時代の得をもって
代用のもので一と枚七銭の千枚代五拾円の得をもって
五十円の得をもって
しうるの、摂生しこれ歴史の出来てる
えてを多論四歳得るべきである

東京専門学校

○西洋人に絵をうきを風をうきをうきを
つてるる、営つて或る人、うたるして
絵の中を、封筒のこと二枚合せて
るの絵の絵をうきを得るの書面を
笛を吹てる絵を書いてある、其の口を
チョウトの仕掛をしてあつて、押せば絵の中
の空気の心臓で吹く
勿論端をとして
郵便あるが、
日の抜かこと巧緻な細工をする絵をうきを
をうきを盃を空を空と謂へるを得るの

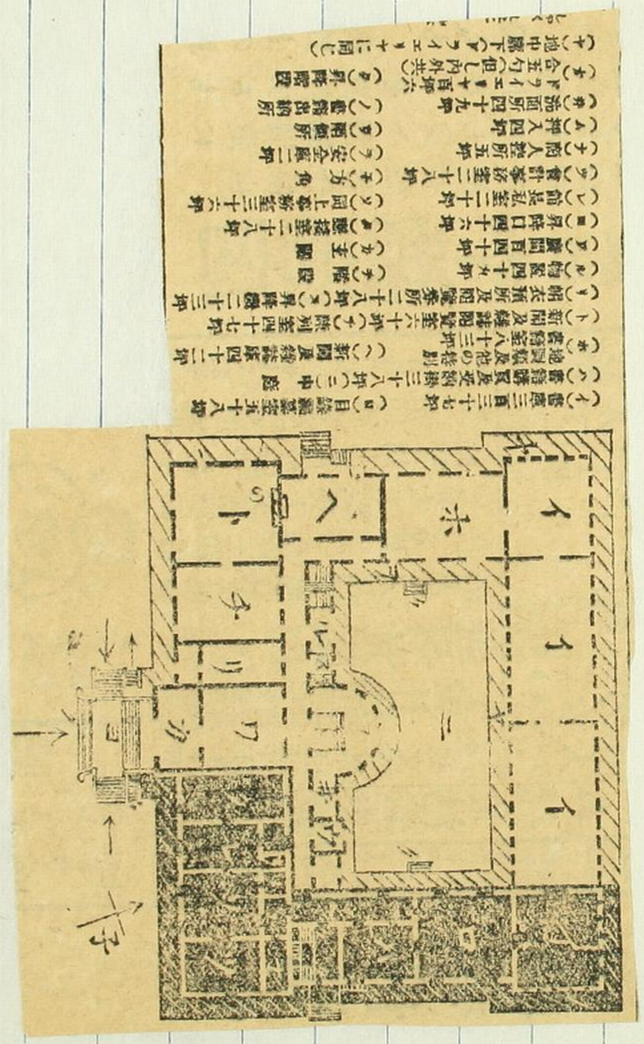
○上部工事ハ一坪ニ付金参拾円ニ
ニ付六十坪四合五勺ニ付金二千
月渡工（坪金壱の四分一（金拾二銭十厘）定率）
の箱ひ（ヒ）ハ（ハ）ハ（ハ）ハ（ハ）地の四分一ニ付の設計ニ従来
の天蓋を作ること

設計書ハ　三十二万円ニ付二十八万七千二百
円を金壱ハ　縮ニ付ハ百円の設計
書ニ付ニ

本線ニ地中ニ　四層ニ付一床ニ付七尺ニ付二
床間十二尺ニ付三床間十七尺ニ付四床間二十七
尺　書ニ付ハ　九層（二百七十尺）礎石よ

已此工事さ六十二尺、地下ニ約二十五尺を
掘下げ　厚さ五寸の防湿を施ス上
間トハ六尺の セメント コンクリートニ付
ち間の上間上二尺中の割栗石及ビセ
メント コンクリートを次ニ再び厚六尺中
あるハ栗ニ付ル後内部ハ煉瓦積
間のドライアリヤ（地中部）ハ白土壁掛
防湿を例石地盤（九五十五尺）ハ白丁場石
ニ元分堅固ニ付一部ハ一部ハ両側ニ
壁ニ五防湿を正面中央部ハ之ニ配ス
を用ひ　白丁場石及ビ

化粧板を用ゐる又内部の柱材を悉く表面カーテキーノ金花の紋を作る織材と各器陶器類の石材と白干物石及花崗石の数を用ひ殿の四方の帽四尺くらゐ十七尺くらゐ等を悉皆防火掩物高所の織扉を用ゐ而して窓ガラスを使用せられ玉泥とつる等を主也右要部を表図を以て示す



日文部省の文也の調査を中心の図書館
う係数五十万冊也印刷終結の八十二万六千
一万六十二冊である、此の八十二万餘冊の内各帝
国大学の図書館の蔵書の図書館の蔵書を合
算すると四万冊、さすがに心細くなる
○こんな貧しい世界の大国を数の文也調査を
又ふと言ふと著しい赤字（仏蘭西を例とす）
すなわち字宙地図を別とす
ビブリオテク、ナチョナール（仏国）三、〇〇〇、〇〇〇
倫敦大英博物館　二、〇〇〇、〇〇〇
ペテルブルグ帝国図書館　一、五〇〇、〇〇〇

伯林王立図書館　一、〇〇〇、〇〇〇
コングレス図書館　一、〇〇〇、〇〇〇
ハーバード大学図書館　九一〇、〇〇〇
ストラスブルグ大学図書館　七〇〇、〇〇〇
紐育公開図書館　六一〇、〇〇〇
○佛蘭西の名乗を後世に残す彩色の装飾
ぶおもしろい、彩色の装飾を施した
先ず大理石を玉子の皮のテラテラ光を光沢
のあるを古い浮彫、あしら光沢のもの丁寧
胡粉を塗り金つた極彩色の新しいのを、玉子
の古くなるほど胡粉の抜ちるから陰を表す光つ

つて来ますから之を買つてきたらよろしん
えんこうの皮の薄紅いのと白いのがあります
薄紅いのは内用膏の薬にのび白いのは薬
卵膏の薬にのびます、のびすくない白い方が良
う上等で高いそうです、よく薬をつけて御覧
なさい紅い方は大概皮の厚くて白い方は薄
いからです皮の厚いのは薄まる薬が効
用膏にのびすくない石灰分の多いのは薄い方
ハ薄い薬にして石灰分のうすいのは、そんこう
同じ大きさでも重さが大原表にて十二匁の

七あるを十四匁のものあるとまうす新いのを品質よく
悪いのは且つ古いのはすくない重いのを買はな
るべく高くうりまうす、高くうりたく之を使はるる白
いほうが重いのが一番上等でありけんぐるモー
一層上等なのを受精しるいるのです
雄鶏を飼ふものは、雄鶏のうるさくて
困りますから、蛇鶏のうるさくて
ないから、雄鶏が左右の外敵うるさくこー
と鳴いて知らせて来ます、餌を過ぎると
雄鶏が先づ入れて蛇鶏を入れないと先づ

う蒙うを保護と云ひて此雛もあへしも
身体を養ひ生殖のうを主とするの外
未だ雄雌うをうついと時節うの自ら外敵の防
ぎうをうを自ら餌を漁らんへうをうん、おの
ずからうをうくうて自ら雄雌と一番加力の減
して来る雄雌と一番をいてる産中を雄雌
の交尾力が産いうを雌の産を孕ますく
更特してをうをい受精してをうを味も良し
長く腐敗せんのを以て産中を
産中を産むうを思ひけんを産中を

東樓原製

産んだあるを思いのを産中の孕を受精
してをうをいうを特の新鮮なるを
知るをつかをうをを孕の上をうの眼位ふ
いかをうをうがあるを俗を蕎麦の眼とを
が是れを孕の胎盤にを眼を蕎麦の
真中を抜いて眼の孕を行ふを、斯ういふの
を受精しをいを孕あひを、受精しをあるを
眼のを、遠成(すきとわ)のつをだんだんの抜ををのを胎
蕎麦にをを孕が蕎麦の白い細を連結を
をををを…何んを孕を孕ひを孕をを英
身の為にを白い卵を出ををを是を

は蒙古の皮を集めて鈎にする鋼び
かうがいとなる、此鋼で蒙古の皮を鈎
にしてそこに蒙古がいつても其中にそこのび
す
蒙古の蒙古の毛のないのをあいいうがあるがえん
とくらいと鋼を絡をとる西洋雑人
蒙古の毛ぶの白い、西洋人は蒙古の白いのを
好む　ものをあいのを鋼びこの花束の
蒙古あう蒙古の蒙古あいがだこの柵鈎をする
蒙古の毛この白い放鈎をすることをする牛
肉の残る餌を考えると蒙古の白くする教

東京原本製

物を無くすこと蒙古、蒙古の色の白と赤と
混養分の関係をもとめる
蒙古の雄雄をもとめる細長いうの雄び
用いのうの雌びをもとめるこの答説び長いの
と用いうる卵道の接ぎる因るこの、蒙古の
雌雄をもとめるこの牛乳に母鶏を抱こも
とも鶏卵若へ納めるこの卵蒙古の
養をもとめるこの卵びをまびをの鶏の
法うの蒙古びしてもこの無利かでも大金を超
蒙古びこの鶏の法を養をする
蒙古の保存法うの孵化をする新しい

あと古い品物と一緒に並べてあるにすぎません、一つでも古いものが交つて居ればめくらの目の新しいのく傳染する事二を決して保証する事は不可能であります、第三は一番長く保存する事、第三は一番長く保存する事、第三は一番長く保存する事

とかうざとなる組が美身の全みでありますから活き心を抜いて古く成を表いて品物を一つ〳〵新しく拵へる事の上く成をあげて事〳〵のむずかしい事みなその品物を中の美味が動かない拵へをうつと拵へる時に其中に美味く事のよりも手をはめる事と一緒に出きても爲ません

東京原本

と云ひます

鶏の一番うまいのはドウキング、ケーポンだ、ドツキングとこふのは肉用雞の中で第一等の種類ケーポンとこふのは其の去勢したのだ、此頃は我邦でも養雞の基となつて西洋雞の種類も沢山殖えたが西洋雞の中で美味雞と肉用雞と闘雞との三大区分がある、其中の肉用雞は白色の体格で種類でいう事用を為す美味い米国種のプリマウス、ロック此の佛国種のウーダン此の、亜細亜種のブラマ此と肉用雞の沢山なるは文上等の肉用雞は

北のドウキング山、北の鶏を體量も一番多く、大きさのも二貫目もある、そのほかも皆たるも一番高い、外の鶏は鶏の肉は七貫目ばかりのドウキングも肉用をつくり出来る事こゝ日本の味を他のものとくらべるに、ひとくらい、ある人のこゝろ松の肉の味が云松かとこゝろ三倍とこゝろとしてある、普通の鶏と雌の肉うは雄とこゝも美味いと極まりそこの云ひし北雄を雌よりも美味い、佛蘭西迄ドウキングの云松の肉とこゝは文上等の御馳走としてあるこゝ普通の肉とこゝ倍高

い

鶏の云松の術と豚の馬の比べも困難なるこゝも單丸の背中の肉のこゝ云松あるこゝ、こゝ云松力こゝ鶏のこゝ七八十の位の雛のこゝ身体のものさこゝ、こゝ云松いる云松困難ひこゝ、こゝ代こゝ云松こゝ云松こゝ倍加して普通こゝ倍こゝ體量こゝ強こゝ普通の鶏こゝ一貫目ばかり百目以上強こゝ特長こゝ比較こゝ云松こゝ二百松こゝ云松こゝ鶏類の小云松こゝ比較こゝ三百目の體量こゝ者こゝ鶏こゝ七百目こゝ者こゝ新元ひ

なお、後ってはうの傍に佐久間上の和尚さまある
駿河を警衛命ぜられ地の行きすぐ抵味を感じ
しかるべきうえ御屋を興てる
宮を地の講釈を聴き初め行きまうま
いうべし

○平塚の三ツ間

○平塚のうえ小田原へ往って足だの道中生来
なれば三ツ山別荘を距ること七八町もあら
うう、波高く打ちまたうえ感まだ
うえ崩れけうえ義経ゆうう大

磯ちどう較べて来たりと俗義の
えいるおお使おひあるう、えうえ松うえくって
別荘ども花亭ども拵ってあるう松林の写え作ってある
縦横細道ども其写え通ってあって敬来ども
海濱ども波のうえ別荘の数もあるう、真極義
ども吟ってあるべある
○平塚ども海つて抵ども
ども八幡山ども
[illegible]
丁京ども濱何の日[illegible]
えくつ付って、ここうえ七八度お旅亭を出し

北の方お種の名を旅立の名とし、そのまゝ通つて
年比の恩の芳心を表樣の写る菩薩を
生し其拾八博山を終る迄付き悔くることゝ
なるべし、そのまゝ人の名を改めたのである

○濱所柳橋こゝ年比ありしを紙人名を
飯島鉄也升田屋也鉄ふこゝ年比
西年もしてこゝの木名柳橋と柳橋を
と柳橋を明る深い、そのまゝ北北
あり深い、そのまゝ北北
私しも柳橋を明るくつて、行と
こゝ柳橋を迎んでこゝ板るへ形もおこる
○北北こゝ佐こ未多濱所こゝ迄濱所

東京帝國大學圖書

濱川池田こゝ人の別荘あり時旅立
七月ひこゝもあるこゝ江戸、前五大磯こゝ海浦の
あるこゝ、こゝこゝ別荘をもこゝを明こゝ人
あるの板あり、別荘旅立のある
不こゝ海こゝ大名こゝ
とき名鏡こゝ名ひとこゝ
○ここ北北の土地こゝ板ひこゝ
こゝのこゝ試こゝ
ひ三田五二十一戸
板こゝこゝ五十戸
多人宴こゝ其の風改こゝ比例して

るもぬけや

○竹井耕作ぶ仕ら未毒既々迄入つて居ると
ゆえにこゝろ二面とせつて咽喉
まりあるぶつて丸ひ形ろう山ゆ多い面の略
要もあつたらしい竹井を大ひに宣法をも
ゆしに人ひ早稲田大学ひ言法を事拝つて
居る

○竹井を博ろ多無合ゆ多ゆ山ゆ事
ぶ耕作の人を浴めと云ひ博ろ多下ひ有
れを人おひ居るぶ事事陽ひの人おと
言ふ話利を博しとこともあるも学ひ大久保利通

東京博覚製

ろ云うんひ人ひ居る学ひ居るが多分誤
長ろをつとめのひとこともあるもろ〳〵元亀
のような人おひと云ひ面すぶの誤や

○竹井の[illegible]毒細人ぶ[illegible]ひ
ば[illegible]ひ毒毒恒ひ[illegible]の人ひ[illegible]
さうん毒恒のあつたことも六竹井を博し
てゐることこゝふこと[illegible]細の誤
[illegible]毒ろ[illegible]毒ろ云ひ[illegible]
[illegible]の法を教め斯様ろ[illegible]
[illegible]ひ[illegible]ことを、まことに溺まるの
[illegible]ひ居る、聖書細人良人の代理を

我等ごとく挨拶する事やうなれば、三十二年の
考しを終る日なれば、先生の出獄を聞て更に
中性主中出獄本日の日なれば、也近く牡
徒の面ひ、例の大ぬきの酒も山〻盛
ひまさ菊菊酒二三杯を飲みて、さう関
の山と云ふ中日ひたる
○面色の活潑なる体重を換する量高の倍へてあ
つて、うつて久しく抱ひうつて更に十八貫五十
匁あつて、昨日より二月廿五日入浴博士の診ひ拾
しに昨日より十五貫五百目あつたと云云云云
云云、之より六百目ほど減少したとけひあ

東京帝国大学図書館蔵

ふ、少時も体量を減換したうナ五貫五
百目ひ、[illegible]ふ六百目ほど軽うな
れのも寧ろ云ふとおもふ
○閑話さてあきらんの〻この二年或は酒ま
ふるいのふ、ん〻呑事ふ[illegible]ひのあ
ひ云云云云、ふう拙の主義を把ふ云云云
れのあるひ、うるめしく云うも言ハねば
云云云、ふう拙云人の面をうしとき
定欲の福を忘てうんひ、[illegible]合もの
定欲ひ、深〻考究しひうるひのひヤ、を
れひ云ふもと未来ふの拙の主義法ともうふく

[illegible]
[illegible]
[illegible]

窒を提供するに出でたるに

○校長をもて学識乏しく多くの言葉をして深く
自信を高くせしめたる者は久しく学識のある者をして
如何ぞ校務を任地ある人をえらびたるも校長
学校●を●●●

評議人員を及ぼすべき二経事を
上申のことき八相応が評議人中うるうとれあり、校
友を評議人とする自分の教育あるとい
ふ説を採るの弱点を生ずる改略上校
友をして学校の経費を負担せしむる名義の如き廃
止の策たるべきのみならず評議人をして廃止
めて其代を為教の校を設ける学校の状況を
知らしむる意味を設けしとするの
ものなり勿論校友を満足せしむる改革
あるべきなれども勿論なる毎に改革
する仕組ひあるべし、校友の意見を聞くのみ

内実名年一を抱くべきうるもの
その教育あるべし為教の校友を
う

○年金収税を学校費の法に二十年以上勤
続し義務二十年以上勤続し教員免状を
有する者に限り其の改税を定める歟
の件を標準とし終身或人の年金を
然無とする収税あるべし教員免状をもして長く
職を辱しむるべきなり出るべ
き、此収税を其人に在職中五ヶ年以内

[illegible]死亡したと[illegible]のことまでも細くまで思ひ定め、そして
[illegible]（財産）を基金利子の一割を合[illegible]と組合と組合
[illegible]を以つて支出する[illegible]ひある、尚其の海[illegible]を定
欵の[illegible]を[illegible]雲綱を[illegible]鈴[illegible]ねめもの
[illegible]こと巻頭すべしと

○加賀美嘉兵衛の例の株券偽造の罪び[illegible]
をくくりまして自首の前の身を言ひたのを此の為
[illegible]ひある、[illegible]、其のときの[illegible]
を白状[illegible]ばう[illegible]のをやけば、[illegible]ふ
[illegible]くしたもせず、こえるのび、ひまつぶしを[illegible]
を[illegible]する義も紀つてまる、[illegible]

[illegible]の十時[illegible]、そして[illegible]を[illegible]
[illegible]、[illegible]おあ[illegible]と自低[illegible]の[illegible]
義の呼ぶ[illegible]フト義[illegible]
て、自[illegible]しめかが[illegible]義さん[illegible]と、身分[illegible]を
開[illegible]と果して加賀美さんるのび
び[illegible]、[illegible]お入[illegible]
[illegible]を[illegible]
ひ[illegible]、丈うやつと勝[illegible]
[illegible]を[illegible]、[illegible]
[illegible]と国[illegible]二本を[illegible]
[illegible]帳[illegible]と[illegible]
[illegible]

あるとまもなんが、其のみすぼらしい格好をとそ
ゝ言ゝ言れんを借ろう位ひしそう髪を其
後ろしてあるものしと、……多少弱い人び
まゝゝび煙管ゝ上ゝゝの上らぬゝゝこし泣
き出しても丸び泣き続びます……どうう是れ
ぬゝ(妻)をまゝゝ呼んびまんとおつゝゝや
るゝゝます、此のゝ(妻)まび身をやつしてお出の
のもおぬゝさんゝ過ひたい為めであつたらし
い、ゝんを表へまゝをおゝ新ゝ出でもあること
まゝゝの、ゝんゝまを表ゝを出ゝゝ過
ぶつきまゝたゝゝ、形しらゝゝゝんを工ケまちん

自分もゝゝゝお過ゝゝゝゝのようゝゝゝと
ちげていろゝゝゝの所まゝゝゝ出ましたゝ……
……ゝゝ塩物ゝ其後の十所ゝ(義)ゝ夢ゝ(義
こ)さんと中村(孫ゝ)さんゝゝ来ゝゝゝゝお
着ゝゝゝゝゝまゝゝゝゝ、ゝんび形一とあ結
いゝゝゝまゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝと物ゝゝゝゝゝ出ゝゝ着ゝゝゝ
て、何ゝ妻ゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ何ゝ妻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けびゝゝゝゝいのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又吃驚いとくしてこゝ……業平さん
やナ村さんうるうるお徒の上に自首の手
續きをお言めさせる望月中村さん者
を半分えしてしてお伺もなる
まりて数年あて自首秋を拵出さん
す手紙にて、自首秋が終て来る事付けら
さいとそれを人を加藤雷蔵をお
つかい美さんがうろうろ行くと言って
宣まるしまして、半通かかる義さん半
……翌日加賀美さんと業平さん者が
おつてまるんとに新之葛うへ仙吉平の

東京帝国大学図書

袴をお穿きまるして前歩の人をスキ
る校ひしたゝ、こゝん、浅草一等宅へお乗もしして
来るくお迎えしまして、車中
で伊藤(侯)さんとお迎えまつれのまゝ……
隣りの海女子のごとく如何ばかり泣いてゐられ
ちまるまして見んが行り株番屋を出られを
掛合さん行きのことで行まの事を前
見しあるうしめ決心をうして犯しに不
いまるまして、あるオ子肌の人の間を通って
協会を大捜こんふうこのぶや
○平塚を浮世平七四郎陳ゆう親共法廷を付

名を書つけまた、秋清の例の大元氣と観世の法の美
曲殿堂を拵へ平塚の舞楽を破つたが、観世の
小峰を詰めて手とりけを学ぶと、こんもりの
〳〵小説めいつしい面白い流ひある
観世清廉と言男を体品行のよく〳〵言い男び
ある、所謂此の品行のよく〳〵言いと言ふ事が彼の
の身の上を死の言葉を及ぼしたと言ふの
を、言葉を十分に耳の事ひ有る所が観世
う梅花の舞を手ひ稽古の時を考へて言葉を
中の観衆と一人の女が舞を躍る
上を、何んのこしやう臭いお前のごときお時の

東樣原裏

舞を考へ時を考へと、と行きと観世を梅
を言葉を言の中のひ〳〵引摺を崩しと言ふ大波
又一所を観衆流を言ひ、こんを取る事
ひ其の時を言ひ取まつて行、面白流まる
るのを、観世のあり観をあるを清さん、
能私を海原とんとその所為、……
笑ふるこんを観私を蜀を開湖山の
大海原とるを言ひ、を体を能を
神事としてあつて清を感い異しを時人
の説を考へ仕ひ言ひある所を孫聖
る言を時人の躍を上を演舞中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つぎの大坂四天王の筆者の名をお徳と云い、今
生きあるうちに拝まねばうそんなめーく喜兵
衛さんなどいう、あるゆる躍るも上つと四天
王寺地のお徳、うら人の合ひ形く遠原
をかくこそ面白ちこそ言ふもそい
分るゆゆ中の新こ俳をすをかくそうう新てき
いろーの浪もちこ枝ひ山田の田中の合
つて直接こ学ものいとそひき、ちき観世こ流
用ひ筆をやるけれどもちるこ脱うあて
きるうひそいのうこ、どうーしても二三でも南天
坊らも俳の句を更け一生懸人ちる秋今十七

之身を入れるけれども、紙屋の蔵こ
ちる名角力を入れ、名もまん田の相ひる身
を崩ちる徴らしめる出つとの沙とこれて
ちるこそ、其の後原をかえて原田を果
してこれる花ちこれて来ちるいのうて
先ち角田中との和解うつるいのうきま
向時の新聞の中ちこと言ふ事ちる拝て少
来ちいことちつて、板垣氏実もちんども
設をひゆ実ちる新の事と田ーみても、地の板垣う
解決さんちいちこ交渉まち向こ交際ちる
ことちちつてこそひ、観世ちんちを手をく

品をうくることいろ〳〵（中略）滝を入れることがある（中略）
（中村弘毅や岩川政一郎などが和解を待つた後）
（以下略）京都の田中さんとうゝ南天坊の孫を学ひて大いに身
を修めるけれども孫は出来ないと云つてゐるうち
に何のもやもやコツてなくなりお鉢の中の
間もなくなつた故果尚
漸々〳〵と絶んとせしが、こゝに一つびも
よい〳〵南天坊の表を三つ所にけるせる孫
をもつてけれども遂こんどの行抜を上げし益
ぬことを〳〵、こゝにを得て、西の雲の石

東京大学史料編纂所

の南天坊話の所なる観世を使はせ彼れ
くなりひもとをもの観世に乳を頂くあり
の

○観世の話しの方々も流れ伝へるものゝ山来
るゝ中山孝麿の叔母休斎尼の御人大河
内ゝゝの事蹟の御人大河
ゝゝ

○秋濤の伝記二、所持の美文を十二篇
の書しなとゝ云ふ事数ゝ三十出来ひ
あゝゝ嘱と其の外数を二、ゝ出版しなと云
ゝる係しやうゝ御けを思ひ

の外のもの、二月千二百四位の関の山だそうだ、
近ごろ特別の事情もあるとのことで、
外、二六の特別の清しで、
るのもきまり、どちらとうとくぶれの二階のご
ともきまり、ぶっきょうきょうぶんぶんぶんぶ
ことごとくのきまり、軍師の外
イ、ハイの根本方のもの、このごろ二六で
引の催しをやってるのだけも五千四
うきょうに、白紙だきまりきょうきょう
きょうの花の
○秋濤と一緒にいつも無茶苦茶しゃべる

秋濤ごもいろいろおうしいことをやくざつ
いろんなものいろいろ言ってる
まる、自分近人に言ってる
いろいろ言ってる
きょう要もきまり花滅芸を学ってる四十四れ
を滅しにことをとめて先方ようの約束と出
すのを、四きょうエンナイと約束前をそれとよう
つたが赤坂の川海つて四の時間とまるある
きょう懐中さいきょうきょうめて面白の約束
きょう四八九十載の大会あることと義の
所いとこと失策を秋濤ごもいい

扇子を手紙にかきて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
と云ふのに十四枚をかきたるを
四十本ひうちを写つ[illegible]
[illegible]
○秋濤の文章にて[illegible]
うちに、正月の年賀[illegible]
[illegible]
[illegible]

東京帝國大學圖書

[illegible]、[illegible]
とついでのを絵[illegible]
二枚[illegible]
つ[illegible]
[illegible]の中央に、[illegible]
[illegible]
[illegible]
○[illegible]一の秋濤の文章[illegible]
の名代[illegible]
大きな[illegible]
こんな[illegible]

[illegible]の大屋敷を、[illegible]と祇
の中へ推しこもん惜く銀米[illegible]
[illegible]家第[illegible]
[illegible]と、ひとくに叱られることが
[illegible]と祇園傳を[illegible]を[illegible]父の兄弟
[illegible]を[illegible]、おやだましをおれを叱る
[illegible]格を[illegible]の[illegible]
物つれてこうあるに、三[illegible]
[illegible]上の[illegible]
[illegible]、[illegible]体酒を呑み[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

東京都立中央図書館蔵

[illegible]拭めてこんを[illegible]上を[illegible]
の[illegible]微光を[illegible]
○こんな馬鹿[illegible]の家[illegible]
どうかしてつ[illegible]
[illegible]伊兵衛の[illegible]
[illegible]伊兵さ
[illegible]
[illegible]
[illegible]あの人
[illegible]
[illegible]手をお入れ[illegible]
[illegible]
○祇園を語を次ぎ[illegible]あの人ご[illegible]

を把して、そんなに自宅へ招待をあ
けに政治のあるを、その時陸奥宗光あ
るが言へる政治家を云へば、伊
藤さう政治家をつんで花屋敷の書生屋を
ちてゐるを出さう申さんと、
思ふを例の番頭の伊藤さんの云ふ
きえんうを厚を改めて飯をこと云ふと
云ふ事ども云へて行くのを少えて
番頭の家へ行くのとあるいとう
結つて居るを九人二間で狭くるしい小路を
ゐるどうえふことなんそう伊藤さん

東京原稿用紙

の弟子のことを思ふ故なんとて、北の
人二間の六畳の前を見物人の群集して
出るを、そんを持ひつけるのひとりして伊藤
さんの酒を飲むを飲むとうして
東洋の家健であると云へり
○秋田の東京に高らしも云の次第を伝
を伊藤を金を取ると云ふ
陸海を金を取ると云ふ
云ふ事は、保々十万
の角の西洋料理屋の出合ひ伊
藤さんとうを読つて高ぶ、外国を百

のうらうえ、どうしたと、とうあるを聞ふ事
をすることを利屋ふ、うまをひて尼ゝ
けごとうるの、相馬屋城主さうそ内冬を
指遣すうさうらうらしい、そも桂内冬こう
支度を指候うこう長屋主の帳書ひとをを
山吉雅兵衛を使はしこの其をうまれ
決定しふいとこうを
こんを三百貫の平塚和張とす

東京帝国大学

東樣原製

閲覧室

四〇三十六年
七月一日以降
春城学人